

能登国府を探る ～能登立国1300年～ (七尾市)

養老2年(718)、能登国が立国し、現在の七尾には、古府や国分の地名や多くの文化遺産が今も残ることから、この地に国府が存在したことは確実とされている。

七尾には、古墳時代に有力豪族の能登臣(のとのおみ)が国造(くにのみやつこ)に任命されて勢力を築き、七尾湾という天然の良港を擁していたことが国府選定に有利に働いたとみられる。

天平20年(748)、能登を旅した大伴家持は、この地の情景を詠んだ和歌を万葉集に遺した。また、七尾には熊甲二十日祭、青柏祭といった古来から受け継がれてきた祭礼が行われている。

能登国府が置かれた七尾には、先人が紡いだ歴史と文化が今も息づいている。



すそえぞあなこふん
須曾蝦夷穴古墳



そうじゃほんでん
総社本殿



のとこくぶんじあと
能登国分寺跡



くまかぶとはつかまつりわくばたぎょうじ
熊甲二十日祭の杵旗行事

能登の禅の古刹と古道を歩く ～永光寺から總持寺へ～

(輪島市、羽咋市)

鎌倉時代に民衆救済の新仏教の一つとして生まれた禅の教えは、總持寺を開山した瑩山紹瑾（けいざんじょうきん）により能登の地に伝えられた。

瑩山の弟子、峨山韶碩（がさんじょうせき）はその教えの発展の礎を築き、峨山が伝道のために歩んだ、永光寺と總持寺を結ぶ険しい山道は、やがて「峨山道（がさんどう）」と呼ばれるようになる。

厳しい「禅」の修行で知られる教えは、前田家の庇護を得て発展し、全国へ広がり、多くの修行僧を受け入れている。能登の「禅の古刹と古道」を訪ねれば、禅の文化を肌で感じることができる。



そうじじそいん
總持寺祖院



がさんどう
峨山道



ようこうじ
永光寺



くろしまでんとうてきけんぞうぶつぐんほぞんちく
黒島伝統的建造物群保存地区

能登の王墓 ～半島を舞台に躍動したノトの王～

(中能登町、羽咋市、志賀町)

日本海に大きく突き出す能登半島は、その地理的な環境から古来より多くの文化を受け入れてきた。ヤマト政権は前方後円墳に代表される王墓を各地に広め、古墳時代の王墓は、権力誇示のためのモニュメントとなった。

能登では、4世紀後半から水陸の要所に「能登の王墓」というにふさわしい規模の古墳が築かれてきた。「能登の王墓」は時代を経て、墳丘上に社が建ち、地域の人々が祈りを捧げる場所へと変容しながらも継承され、様々な文化や伝承を生み出し、今も引き継がれている。



あめ みやこふんぐん
雨の宮古墳群



こだなか かしんのうつかこふん
小田中親王塚古墳



みじろなべやまこふん
水白鍋山古墳



の としょうふ
能登上布